

(19) 日本国特許庁(JP)

(12) 公開特許公報(A)

(11) 特許出願公開番号

特開2005-126327

(P2005-126327A)

(43) 公開日 平成17年5月19日(2005.5.19)

(51) Int.Cl.⁷

A 6 1 K 7/035

A 6 1 K 7/00

A 6 1 K 7/02

F I

A 6 1 K 7/035

A 6 1 K 7/00

A 6 1 K 7/02

テーマコード (参考)

4 C O 8 3

B

P

審査請求 未請求 請求項の数 5 O L (全 9 頁)

(21) 出願番号 特願2003-360064 (P2003-360064)

(22) 出願日 平成15年10月21日 (2003.10.21)

(71) 出願人 000113470

ポーラ化成工業株式会社

静岡県静岡市弥生町6番48号

(72) 発明者 宮澤 雅一

神奈川県横浜市神奈川区高島台27番地1

ポーラ化成工業株式会社横浜研究所内

Fターム(参考) 4C083 AB171 AB172 AB211 AB212 AB222

AB232 AB242 AB322 AB331 AB332

AB341 AB342 AB432 AB441 AB442

AC022 AD152 CC03 DD21 EE05

FF01

(54) 【発明の名称】 化粧崩れ防止化粧料

(57) 【要約】

【課題】 従来では対応できなかった、皮脂濡れと、皮脂流れの両方を防ぎ、化粧持ちを向上させる手段を提供する。

【解決手段】 1) 水を包含させた多孔性粉体と、2) 次に挙げる金属酸化物、金属塩及び粘土鉱物から選択される1種乃至は2種以上((金属酸化物、金属塩、粘土鉱物)酸化亜鉛、塩化亜鉛、塩化マグネシウム、塩化カルシウム、塩化アルミニウム、金属ピラードクレー)とを含有することを特徴とする、化粧崩れ防止用の化粧料を提供する。多孔性粉体としては、シリカ、アルミナ、炭酸カルシウム、炭酸マグネシウムなどが好適に例示できる。

【選択図】 なし

【特許請求の範囲】

【請求項 1】

1) 水を包含させた多孔性粉体と、2) 次に挙げる金属酸化物、金属塩及び粘土鉱物から選択される 1 種乃至は 2 種以上とを含有することを特徴とする、化粧崩れ防止用の化粧料。

(金属酸化物、金属塩、粘土鉱物)

酸化亜鉛、塩化亜鉛、塩化マグネシウム、塩化カルシウム、塩化アルミニウム、金属ピラードクレー

【請求項 2】

前記多孔性粉体が、超微粒子シリカであることを特徴とする、請求項 1 に記載の化粧料。 10

【請求項 3】

前記金属酸化物、金属塩及び粘土鉱物から選択される 1 種乃至は 2 種以上が、酸化亜鉛を含むことを特徴とする、請求項 1 又は 2 に記載の化粧料。

【請求項 4】

鼻梁部を特異的な投与部位とすることを特徴とする、請求項 1～3 何れか 1 項に記載の化粧料。

【請求項 5】

防止すべき化粧崩れが、皮脂による崩れであることを特徴とする、請求項 1～4 何れか 1 項に記載の化粧料。

【発明の詳細な説明】 20

【技術分野】

【0001】

本発明は、化粧料に関し、更に詳細には、鼻梁部等の皮脂分泌量の多い部分に適用して、該皮脂分泌に起因して起こる化粧崩れを防止するのに有用な化粧料に関する。

【背景技術】

【0002】

本来に皮膚の欠点をカバーし、美しく装う機能を有することから、メイクアップ化粧料は、美しく装う目的で広く普及しており、その有用性は誰もが認めるところである。通常この様なメイク機能は、粉体原料の、隠蔽性や加色効果などの光学効果に依存するところが大きい。従って、かかる光学効果を維持するためには、つけたときの状態で、粉体原料が皮膚上に留まっていることが必要となる。通常は、時間とともに、粉体原料は物理的に脱落したり、汗や皮脂に濡れて、光学効果が異なってしまうたりするのが一般的である。これが所謂化粧崩れと言われる現象である。この化粧崩れの要因である、前記粉体類の脱落の原因としては、粉体類の付着性の程度、汗による流れ、皮脂による流れなどが存し、前記光学効果の変化の原因としては、汗などの水性組成物による粉体類の濡れ変化、皮脂などの油性組成物による粉体類の濡れ変化などが存する。即ち、化粧持ちを改善するためには、この様な脱落と光学効果の変化を抑制することが必要となる。この内、物理的脱落に対しては、メタクリル酸エステル誘導体などの粘着性高分子の被膜を皮膚上に形成させる方法や（例えば、特許文献 1、特許文献 2 を参照）、固着性の良いワックス基剤の化粧料への配合などの方法（例えば、特許文献 3 を参照）などでの対応が存し、皮脂濡れや汗濡れへの対応としては、撥水撥油性高分子での粉体処理などの方法（例えば、特許文献 4、特許文献 5、特許文献 6 を参照）が存する。又、過剰に分泌された皮脂をシリコンエラストマーなどで吸収させる方法（例えば、特許文献 7 を参照）も存する。しかしながら、前記被膜形成や固着強化などの方法では、物理的脱落は防げても、色材の濡れ変化は防げず、撥水撥油性の表面処理の方法では、濡れ変化は防げても、皮膚や他の化粧料成分との馴染みが損なわれ、場合によっては却って物理的脱落が促進されるケースも存する。皮脂の吸収では、今までに知られている吸収素材では十分な吸収は望めず、その効果は大きいとは言えない。特に、鼻梁部などの皮脂分泌の多いところでは、この欠点は顕著であった。即ち、これまでの化粧崩れ防止の方法では、従来に比べては化粧崩れを防ぐことが出来たものの、十分な改善までは望めないのが現状であった。 30 40 50

【0003】

【特許文献1】特開2002-60322号公報

【特許文献2】特開平07-187951号公報

【特許文献3】特開平02-20620号公報

【特許文献4】特開2003-146829号公報

【特許文献5】特開2002-194337号公報

【特許文献6】特開2001-2524号公報

【特許文献7】特開2001-114623号公報

【発明の開示】

【発明が解決しようとする課題】

10

【0004】

本発明は、このような状況下為されたものであり、従来では対応できなかった、皮脂濡れと、皮脂流れの両方を防ぎ、化粧持ちを向上させる手段を提供することを課題とする。

【課題を解決するための手段】

【0005】

このような状況に鑑みて、本発明者らは、従来では対応できなかった、皮脂濡れと、皮脂流れの両方を防ぎ、化粧持ちを向上させる手段を求めて、鋭意研究努力を重ねた結果、1) 水を包含させた多孔性粉体と、2) 次に挙げる金属酸化物、金属塩及び粘土鉱物から選択される1種乃至は2種以上（（金属酸化物、金属塩、粘土鉱物）酸化亜鉛、塩化亜鉛、塩化マグネシウム、塩化カルシウム、塩化アルミニウム、金属ピラードクレ）とを含有することを特徴とする、化粧崩れ防止用の化粧料がその様な特性を有していることを見出し発明を完成させるに至った。即ち、本発明は以下に示す技術に関するものである。

20

(1) 1) 水を包含させた多孔性粉体と、2) 次に挙げる金属酸化物、金属塩及び粘土鉱物から選択される1種乃至は2種以上とを含有することを特徴とする、化粧崩れ防止用の化粧料。

(金属酸化物、金属塩、粘土鉱物)

酸化亜鉛、塩化亜鉛、塩化マグネシウム、塩化カルシウム、塩化アルミニウム、金属ピラードクレ

(2) 前記多孔性粉体が、超微粒子シリカであることを特徴とする、(1)に記載の化粧料。

30

(3) 前記金属酸化物、金属塩及び粘土鉱物から選択される1種乃至は2種以上が、酸化亜鉛を含むことを特徴とする、(1)又は(2)に記載の化粧料。

(4) 鼻梁部を特異的な投与部位とすることを特徴とする、(1)～(3)何れか1項に記載の化粧料。

(5) 防止すべき化粧崩れが、皮脂による崩れであることを特徴とする、(1)～(4)何れか1項に記載の化粧料。

【発明の効果】

【0006】

本発明によれば、従来では対応できなかった、皮脂濡れと、皮脂流れの両方を防ぎ、化粧持ちを向上させる手段を提供することができる。

40

【発明を実施するための最良の形態】

【0007】

<1>本発明の化粧料の必須成分である水を包含させた多孔性粉体

本発明の化粧料は、水を包含させた多孔性粉体を必須成分として含有することを特徴とする。このような構成を取るために好適な多孔性粉体としては、水との親和性を有し、触媒などの分野で一般的に多孔性であると認められている粉体であれば特段の限定はなく使用することが出来、例えば、シリカ、アルミナ、炭酸カルシウム、炭酸マグネシウムなどが好適に例示でき、特にシリカが好ましい。又、かかる多孔性粉体の平均粒径としては、細かいものが好ましく、具体的な平均粒径としては、0.0001ミクロンから0.1ミクロンの微粒子が好ましく、特に好ましくは0.005ミクロンから0.02ミクロンの超

50

微粒子が例示できる。又、かかる多孔性粉体は、水を包含できる条件において、表面処理を施すことが出来、かかる表面処理としては、ハイドロジェンメチルポリシロキサンを焼き付け、フッ化炭化水素基を有していても良いシリルカップリング剤によるシリル化処理、金属石けん被覆処理、レシチン被覆処理、アシル化アミノ酸及び／又はその塩による被覆処理などが好適に例示でき、処理量としては、粉体全量に対して0.1～20質量%が好適に例示できる。特に好ましくは、ハイドロジェンメチルポリシロキサンを焼き付け処理して、疎水化した形態である。これは、この様な形態を取ることににより、水をマイクロカプセルの形態で包含し、肌上で水をリリースした後、多孔性粉体が速やかに皮脂吸収特性を発揮するためである。疎水化処理していない場合に於いては、皮膚上で水をリリースした後も、粉体表面が水濡れしているため、皮脂吸収作用を発揮するまでにラグ・タイムを要する。斯くの如き作用を有する、水包含多孔性粉体を調整するためには、多孔性粉体をヘンシェルミキサーなどに仕込み、攪拌混合下、水乃至は水を多く含有する水性担体を噴霧し、水滴を核とし、その周囲に多孔性粉体が被覆層を形成するような形態に流動層造粒すればよい。この時、水と多孔性粉体の好ましい量比は、5：1～1：2であり、更に好ましくは3：1～2：3である。又、かかる水包含多孔性粉体の、本発明の化粧料に於ける好ましい含有量は、5～70質量%であり、更に好ましくは10～60質量%である。以下に、水包含多孔性粉体の製造例を示す。

【0008】

<製造例1>

超微粒子シリカ（平均粒径0.005ミクロン）48質量部をヘンシェルミキサーに仕込み、これに、2質量部のハイドロジェンメチルポリシロキサンを8質量部の石油エーテルに溶解した溶液を、粉体を攪拌混合しながら、噴霧し、しかる後、40℃で送風、溶媒除去し、300℃で8時間焼成して、疎水化超微粒子シリカを得た。この疎水化超微粒子シリカ50質量部をヘンシェルミキサー仕込み、攪拌下、50質量部の水を噴霧し、水包含率50質量%の水包含シリカ1を得た。

【0009】

<製造例2>

製造例1と同様の処理で、粉体50質量部と水100質量部を処理し、水包含率67%の水包含シリカ2（シリカの平均粒径0.005ミクロン）を得た。

【0010】

<製造例3>

製造例1と同様に、超微粒子シリカをアルミナ（平均粒径0.02ミクロン）に代え、処理し、含水率50質量%の水包含アルミナを得た。

【0011】

<製造例4>

製造例1と同様に、超微粒子シリカを炭酸カルシウム（平均粒径0.01ミクロン）に代え、処理し、含水率50質量%の水包含炭酸カルシウムを得た。

【0012】

<2>本発明の化粧料の必須成分である金属酸化物、金属塩及び粘土鉱物から選択される1種乃至は2種以上

本発明の化粧料は、次に挙げる金属酸化物、金属塩及び粘土鉱物から選択される1種乃至は2種以上を含有することの特徴とする。

（金属酸化物、金属塩、粘土鉱物）

酸化亜鉛、塩化亜鉛、塩化マグネシウム、塩化カルシウム、塩化アルミニウム、金属ピラードクレ

これらの金属酸化物、金属塩及び粘土鉱物は何れも、化粧料原料であり、市販品も存し、その入手は極めて容易である。これらの内、金属ピラードクレーとは、ベントナイト、ヘクソライト、カオリンなどのような粘土鉱物にアルミニウムや亜鉛などの金属塩乃至は金属酸化物、金属水酸化物を層間に導入し（インターカレート乃至はクラスレート）、イオン交換性を持たせた粘土類の総称であるが、この様な金属ピラードクレーの化粧料用のグ

レードとしては、大東化成株式会社より、販売されている「オイルセンサーパウダー」（70質量%のベントナイトに10質量%の水酸化アルミニウムと、20質量%の酸化亜鉛を層間にクラスレートしたもの）が存し、このものが特に好適に例示できる。これらの金属酸化物、金属塩、粘土鉱物の内、本発明の化粧料で特に好適なものとしては、酸化亜鉛、金属ピラードクレイが例示でき、中でも酸化亜鉛が特に好ましい。この様な金属酸化物、金属塩、粘土鉱物はそのまま使用することも出来るし、前記水包含多孔性粉体と同様に、表面処理などを施して使用することも出来る。かかる金属酸化物、金属塩、粘土鉱物は、分泌した皮脂が、分泌部より、顔全体に広がるのを防ぐ作用を有する。この為、小鼻などの脂質分泌の著しい部位に投与すると、ここから分泌された皮脂が広がらず、これによる化粧崩れを防ぐ効果を奏する。この様な効果を奏するためには、前記金属酸化物、金属塩、粘土鉱物は、化粧料全量に対して、総量で1～40質量%含有することが好ましく、更に好ましくは5～30質量%の含有である。

10

【0013】

<3>本発明の化粧料

本発明の化粧料は、前記1)水を包含させた多孔性粉体と、2)次に挙げる金属酸化物、金属塩及び粘土鉱物から選択される1種乃至は2種以上（金属酸化物、金属塩、粘土鉱物：酸化亜鉛、塩化亜鉛、塩化マグネシウム、塩化カルシウム、塩化アルミニウム、金属ピラードクレイ）とを含有することの特徴とする。本発明の化粧料は、かかる構成をすることにより、皮脂分泌の著しい箇所において、皮脂の分泌を抑制するとともに、皮脂が顔の他の部位に拡散するのを防ぐ作用を有する。従って、本発明の化粧料は、メイクアップ化粧料などの下に塗布し、前記メイクアップ化粧料の皮脂による崩れを防ぐ目的で使用する事が好ましい。又、剤形としては通常粉体化粧で知られている剤形であれば特段の限定を受けずに適用できるが、特に好ましい形態としては、ルースパウダー乃至は固形白粉が好ましく例示でき、固形白粉の場合は、ソフトプレスタイプのものが特に好適に例示できる。これは、あまりプレス圧が高すぎると、水包含多孔質粉体の水内包カプセル構造を損傷し効果を減ずる場合が存するためである。又、本発明の化粧料の適用部位としては、前記の如く脂質分泌の著しい部分が好ましく例示でき、特に好ましいのは、小鼻に局所的に投与するような形態である。

20

【0014】

本発明の化粧料には、前記の必須成分以外に通常化粧料で使用する任意成分を含有することができる。この様な任意成分としては、例えば、マカデミアナッツ油、アボガド油、トウモロコシ油、オリーブ油、ナタネ油、ゴマ油、ヒマシ油、サフラワー油、綿実油、ホホバ油、ヤシ油、パーム油、液状ラノリン、硬化ヤシ油、硬化油、モクロウ、硬化ヒマシ油、ミツロウ、キャンドリラロウ、カルナウバロウ、イボタロウ、ラノリン、還元ラノリン、硬質ラノリン、ホホバロウ等のオイル、ワックス類、流動パラフィン、スクワラン、プリスタン、オゾケライト、パラフィン、セレシン、ワセリン、マイクロクリスタリンワックス等の炭化水素類、オレイン酸、イソステアリン酸、ラウリン酸、ミリスチン酸、パルミチン酸、ステアリン酸、ベヘン酸、ウンデシレン酸等の高級脂肪酸類、セチルアルコール、ステアリルアルコール、イソステアリルアルコール、ベヘニルアルコール、オクチルドデカノール、ミリスチルアルコール、セトステアリルアルコール等の高級アルコール等、イソオクタン酸セチル、ミリスチン酸イソプロピル、イソステアリン酸ヘキシルデシル、アジピン酸ジイソプロピル、セバチン酸ジ-2-エチルヘキシル、乳酸セチル、リンゴ酸ジイソステアリル、ジ-2-エチルヘキサン酸エチレングリコール、ジカプリン酸ネオペンチルグリコール、ジ-2-ヘプチルウンデカン酸グリセリン、トリ-2-エチルヘキサン酸グリセリン、トリ-2-エチルヘキサン酸トリメチロールプロパン、トリイソステアリン酸トリメチロールプロパン、テトラ-2-エチルヘキサン酸ペンタンエリトリット等の合成エステル油類、ジメチルポリシロキサン、メチルフェニルポリシロキサン、ジフェニルポリシロキサン等の鎖状ポリシロキサン、オクタメチルシクロテトラシロキサン、デカメチルシクロペンタシロキサン、ドデカメチルシクロヘキサンシロキサン等の環状ポリシロキサン、アミノ変性ポリシロキサン、ポリエーテル変性ポリシロキサン、アル

30

40

50

キル変性ポリシロキサン、フッ素変性ポリシロキサン等の変性ポリシロキサン等のシリコーン油等の油剤類、脂肪酸セッケン（ラウリン酸ナトリウム、パルミチン酸ナトリウム等）、ラウリル硫酸カリウム、アルキル硫酸トリエタノールアミンエーテル等のアニオン界面活性剤類、塩化ステアリルトリメチルアンモニウム、塩化ベンザルコニウム、ラウリルアミノオキサイド等のカチオン界面活性剤類、イミダゾリン系両性界面活性剤（２－ココイル－２－イミダゾリニウムヒドロキサイド－１－カルボキシエチロキシ２ナトリウム塩等）、ベタイン系界面活性剤（アルキルベタイン、アミドベタイン、スルホベタイン等）、アシルメチルタウリン等の両性界面活性剤類、ソルビタン脂肪酸エステル類（ソルビタンモノステアレート、セスキオレイン酸ソルビタン等）、グリセリン脂肪酸類（モノステアリン酸グリセリン等）、プロピレングリコール脂肪酸エステル類（モノステアリン酸プロピレングリコール等）、硬化ヒマシ油誘導体、グリセリンアルキルエーテル、ＰＯＥソルビタン脂肪酸エステル類（ＰＯＥソルビタンモノオレエート、モノステアリン酸ポリオキエチレンソルビタン等）、ＰＯＥソルビット脂肪酸エステル類（ＰＯＥ－ソルビットモノラウレート等）、ＰＯＥグリセリン脂肪酸エステル類（ＰＯＥ－グリセリンモノイソステアレート等）、ＰＯＥ脂肪酸エステル類（ポリエチレングリコールモノオレート、ＰＯＥジステアレート等）、ＰＯＥアルキルエーテル類（ＰＯＥ２－オクチルドデシルエーテル等）、ＰＯＥアルキルフェニルエーテル類（ＰＯＥノニルフェニルエーテル等）、プルロニック型類、ＰＯＥ・ＰＯＰアルキルエーテル類（ＰＯＥ・ＰＯＰ２－デシルテトラデシルエーテル等）、テトロニック類、ＰＯＥヒマシ油・硬化ヒマシ油誘導体（ＰＯＥヒマシ油、ＰＯＥ硬化ヒマシ油等）、ショ糖脂肪酸エステル、アルキルグルコシド等の非イオン界面活性剤類、ポリエチレングリコール、グリセリン、１，３－ブチレングリコール、エリスリトール、ソルビトール、キシリトール、マルチトール、プロピレングリコール、ジプロピレングリコール、ジグリセリン、イソプレングリコール、１，２－ペンタンジオール、１，２－ヘキシレングリコール、１，２－オクタジオール等の多価アルコール類、ピロリドンカルボン酸ナトリウム、乳酸、乳酸ナトリウム等の保湿成分類、グアガム、クインシード、カラギーナン、ガラクトタン、アラビアガム、ペクチン、マンナン、デンプン、キサントガム、カードラン、メチルセルロース、ヒドロキシエチルセルロース、カルボキシメチルセルロース、メチルヒドロキシプロピルセルロース、コンドロイチン硫酸、デルマトン硫酸、グリコーゲン、ヘパラン硫酸、ヒアルロン酸、ヒアルロン酸ナトリウム、トラガントガム、ケラタン硫酸、コンドロイチン、ムコイチン硫酸、ヒドロキシエチルグアガム、カルボキシメチルグアガム、デキストラン、ケラト硫酸、ローカストビーングラム、サクシノグルカン、カロニン酸、キチン、キトサン、カルボキシメチルキチン、寒天、ポリビニルアルコール、ポリビニルピロリドン、カルボキシビニルポリマー、ポリアクリル酸ナトリウム、ポリエチレングリコール、ベントナイト等の増粘剤、表面を処理されていても良い、マイカ、タルク、カオリン、合成雲母、炭酸カルシウム、炭酸マグネシウム、水を包含していない無水ケイ酸（シリカ）等の必須成分に分類されない粉体類、表面を処理されていても良い、ベンガラ、黄酸化鉄、黒酸化鉄、酸化コバルト、群青、紺青、酸化チタンの無機顔料類、表面を処理されていても良い、雲母チタン、魚鱗箔、オキシ塩化ビスマス等のパール剤類、レーキ化されていても良い赤色２０２号、赤色２２８号、赤色２２６号、黄色４号、青色４０４号、黄色５号、赤色５０５号、赤色２３０号、赤色２２３号、橙色２０１号、赤色２１３号、黄色２０４号、黄色２０３号、青色１号、緑色２０１号、紫色２０１号、赤色２０４号等の有機色素類、ポリエチレン末、ポリメタクリル酸メチル、ナイロン粉末、オルガノポリシロキサンエラストマー等の有機粉体類、パラミノ安息香酸系紫外線吸収剤、アントラニル酸系紫外線吸収剤、サリチル酸系紫外線吸収剤、桂皮酸系紫外線吸収剤、ベンゾフェノン系紫外線吸収剤、糖系紫外線吸収剤、２－（２’－ヒドロキシ－５’－ｔ－オクチルフェニル）ベンゾトリアゾール、４－メトキシ－４’－ｔ－ブチルジベンゾイルメタン等の紫外線吸収剤類、エタノール、イソプロパノール等の低級アルコール類、ビタミンＡ又はその誘導体、ビタミンＢ_６塩酸塩、ビタミンＢ_６トリパルミテート、ビタミンＢ_６ジオクタノエート、ビタミンＢ_２又はその誘導体、ビタミンＢ_{１２}、ビタミンＢ_{１５}又はその誘導体等のビタミンＢ類、α－トコフェロール、β

10

20

30

40

50

ートコフェロール、 γ -ートコフェロール、ビタミンEアセテート等のビタミンE類、ビタミンD類、ビタミンH、パントテン酸、パンテチン、ピロロキノリンキノン等のビタミン類などが好ましく例示できる。本発明の化粧料は、かかる必須成分と、任意成分とを常法に従って処理することにより製造することが出来る。

【実施例】

【0015】

以下に、実施例を挙げて、本発明について更に詳細に説明を加えるが、本発明が、かかる実施例にのみ限定されないことは言うまでもない。

【0016】

<実施例1>

以下に示す処方に従って、本発明の化粧料を作成した。即ち、Iの成分を1mmヘリングボーンスクリーンを装着したパルベライザーで粉碎し、ロの成分とともにダブルプラネタリーミキサーで混合し、ルースパウダー状の化粧料1を得た。

I

酸化亜鉛	30	重量部
タルク	10	重量部

ロ

製造例1の水包含多孔性粉体	60	重量部
---------------	----	-----

【0017】

<試験例1>

実施例1の化粧料1と、化粧料1の酸化亜鉛を二酸化チタンに置換した比較例1の化粧料と、化粧料1の製造例1の水包含多孔性粉体を超微粒子シリカ（平均粒径0.005ミクロン）に置換した比較例2の化粧料を用いて、皮脂での化粧崩れしやすいパネラー（1名）を用いて、化粧崩れ防止試験を行った。即ち、1日目パネラーは、下地をつけずに下記に示すファンデーション1を塗布し（対照例）、2時間静かに過ごし、小鼻と頬部の色差を色差計で測色した。2日目は、下地として化粧料1を、起毛パフ（毛足の長さ3mm）を用いて塗布し、その後ファンデーション1を塗布し、同様に2時間後頬部との色差を測定した。3日目は、2日目の化粧料1を比較例1に変え同様に処置した。4日目は2日目の化粧料1を比較例2に変え、同様に処置した。色差の計測値を表1に示す。これより、本発明の化粧料は化粧崩れを防ぐ作用が著しいことが判る。

（ファンデーション1）

二酸化チタン	20	重量部
酸化鉄	7	重量部
セリサイト	30	重量部
マイカ	23	重量部
流動パラフィン	10	重量部
ジメチコン	10	重量部

【0018】

【表1】

表1：経時による色差

サンプル	色差 (ΔE)
対照例	3.21
化粧料1	0.54
比較例1	2.03
比較例2	2.28

【0019】

<実施例2～4>

化粧料1の水包含多孔性粉体の種類を変えて、本発明の化粧料を作成し、試験例1と同様に化粧崩れの著しいパネラーを使用して評価した。比較例に相当するものについては作成しなかった。結果を表2に示す。これより、本発明の化粧料では、製造例1の粉体同様に製造例2～4の粉体も使用できることが判る。水包含多孔性粉体としては、超微粒子のシリカが好ましいことが判る。

イ

酸化亜鉛 3 0 重量部

タルク 1 0 重量部

ロ

表 2 記載の水包含多孔性粉体 6 0 重量部

【0 0 2 0】

【表 2】

表 2：経時による色差

サンプル	水包含多孔性粉体	色差 (ΔE)
対照例 (2 回目)	なし	3. 3 5
実施例 2	製造例 2 の水包含多孔性粉体	0. 9 3
実施例 3	製造例 3 の水包含多孔性粉体	0. 8 2
実施例 4	製造例 4 の水包含多孔性粉体	0. 8 9

10

【0 0 2 1】

< 実施例 5 ～ 7 >

化粧料 1 の金属酸化物、金属塩、粘土鉱物の種類を変えて、本発明の化粧料を作成し、試験例 1 と同様に化粧崩れの著しいパネラーを使用して評価した。比較例に相当するものについては作成しなかった。結果を表 3 に示す。これより、本発明の化粧料では、先に例示した、何れの金属酸化物、金属塩、粘土鉱物も使用できることが判る。

イ

表 3 記載の金属酸化物、金属塩、粘土鉱物 1 0 重量部

二酸化チタン 2 0 重量部

タルク 1 0 重量部

ロ

製造例 1 の水包含多孔性粉体 6 0 重量部

【0 0 2 2】

【表 3】

表 3：経時による色差

サンプル	金属酸化物、金属塩、粘土鉱物	色差 (ΔE)
対照例 (3 回目)	なし	3. 1 7
実施例 5	塩化マグネシウム	0. 9 8
実施例 6	塩化アルミニウム	1. 1 9
実施例 7	「オイルセンサーパウダー」	0. 7 3

20

【0 0 2 3】

< 実施例 8 >

以下に示す処方に従って、本発明の化粧料を作成した。即ち、イの成分を 1 m m ヘリングボーンスクリーンを装着したパルペライザーで粉碎し、ロの成分とともにダブルプラネタリーミキサーで混合し、更に、ハの成分を噴霧してコートし、これをソフトプレスし、ソフトプレス状の化粧料 8 を得た。

イ

酸化亜鉛 3 0 重量部

タルク 1 0 重量部

ロ

製造例 1 の水包含多孔性粉体 5 0 重量部

ハ

ジメチコン 1 0 重量部

【0 0 2 4】

< 試験例 2 >

実施例 8 の化粧料 8 と、化粧料 8 の酸化亜鉛を二酸化チタンに置換した比較例 3 の化粧料と、化粧料 8 の製造例 1 の水包含多孔性粉体を超微粒子シリカ（平均粒径 0. 0 0 5 ミクロン）に置換した比較例 4 の化粧料を用いて、皮脂での化粧崩れしやすいパネラー（1 名）を用いて、化粧崩れ防止試験を行った。即ち、1 日目パネラーは、下地をつけずに前記に示すファンデーション 1 を塗布し（対照例）、2 時間静かに過ごし、小鼻と頬部の色差を色差計で測色した。2 日目は、下地として化粧料 8 を、起毛パフ（毛足の長さ 3 m m

30

40

50

）を用いて塗布し、その後ファンデーション1を塗布し、同様に2時間後頬部との色差を測定した。3日目は、2日目の化粧料8を比較例3に変え同様に処置した。4日目は2日目の化粧料8を比較例4に変え、同様に処置した。色差の計測値を表4に示す。これより、本発明の化粧料はソフトプレス状であっても化粧崩れを防ぐ作用が著しいことが判る。

【0025】

【表4】

表4：経時による色差

サンプル	色差(ΔE)
対照例(4回目)	3.17
化粧料8	0.66
比較例3	2.35
比較例2	2.51

10

【産業上の利用可能性】

【0026】

本発明は、脂質による化粧崩れ防止用の化粧料に応用できる。